

愛知の保健・体育

(第54集)

目次

I 体育	2
1 はじめに	2
2 教育研究愛知県集会について	2
(1) 概要	
(2) 実践報告のまとめ	
(3) 討論の内容	
(4) 指導・助言	
3 今後の課題	4
4 授業実践（榎小学校の実践）	5
II 保健	13
1 はじめに	13
2 教育研究愛知県集会について	13
(1) 概要	
(2) 報告と討論のまとめ	
(3) 指導・助言	
3 今後の課題	20
4 授業実践（開明小学校の実践）	21

愛知教職員組合連合会 教育課程研究委員会・保健体育部会

2024年度 教育課程研究委員

ブロック推薦

◎部長 ○副部長

名古屋			尾張			三河		
名前	単組	分会	名前	単組	分会	名前	単組	分会
小林 太一	名古屋	川名中	道脇 大斗	知教連	大府北中	武野 匡史	豊橋	幸小
中島 とも子	名古屋	白山中	釜下 隼亮	愛知	日進中	○荒川 志保	豊川	国府小

第71次～第73次教育研究全国集会レポート提出者

71次			72次			73次		
名前	単組	分会	名前	単組	分会	名前	単組	分会
◎糟谷 正幸	西尾	平坂中	○弓谷 孝司	名古屋	伊勝小	藤江 亜花菜	蒲郡	西浦小
宇野 実里	豊田	保見中	(代)竹田 悠生	名古屋	八王子中	(代)鈴木 葵	海部	神島田小

第74次教育研究全国集会レポート提出者
 体育 佐藤 健介（名古屋・榎小）
 保健 小澤 菜摘（豊田・足助中）

I 体 育

1 はじめに

「体育でどのような子どもを育てるか。自ら考えて行動する子どもをどう育てるか」を大テーマとし教育研究活動を推進してきた。「わかる・できる・かかわることを大切にした授業づくり」「ねばり強く学ぶことをめざした教材や指導方法の工夫した授業づくり」を研究の柱とし活動をすすめている。各領域の基礎・基本、系統性をふまえた指導内容、新しい教育課程に対応した授業づくりの検討も行っている。

教育研究愛知県集会では、上記の柱立てに沿って、明日に生きる子どもたちの健やかな成長をめざした体育授業のあり方について討議を深めることができた。

2 教育研究愛知県集会について

(1) 概要

実践内容の傾向として、ICT 機器を活用して自分の動きや仲間の動きについて振り返り課題を解決する方法、共生できる体育学習をめざした教具やタスクゲームのさまざまな工夫のある実践が報告された。

討論は二つの柱に分けて行われた。まず、一つ目の柱である「わかる・できる・かかわることを大切にした授業づくり」では、「ICT 機器を活用して、子どもたちにどのように課題を見付けさせ、解決させていくか」、「ICT 機器を活用することで運動量の確保はどうしていくのか」という点で、さまざまな授業づくりの工夫や考え方について意見が出された。助言者からは、体育学習の中で ICT 機器の活用をすることが主軸になることのないような授業づくりの工夫が必要であると助言を受けた。また、ICT 機器では、得ることのできない相手との攻防や感覚をつかむことが、本来の運動する楽しさや面白さであることなど、仲間とのかかわりの必要性も挙げられた。

次に二つ目の柱である「ねばり強く学ぶことをめざした教材や指導方法の工夫した授業づくり」では、教材は、子どもたちの運動に対する恐怖心や苦手意識を取り除くための「心理的安全性を考えた教材の作成」、ねばり強く学習に取り組ませるために、「自己肯定感が高まる声掛け」をすることが効果的であるという意見が出された。助言者からは、声掛けで大切なことは「意図のある声掛けをすること」であり指示だけでなく、子どもたちが困りごとに直面したときに適切なアドバイスをすることが、子どもたちの引き出しになると助言を受けた。また、ねばり強く学ぶために子どもたちの知識及び技能は足りているのか見取る必要があると助言を受けた。各領域で知識及び技能で、何が求められているのか、理解して教材や指導の工夫にあたる必要があることが挙げられた。

(2) 実践報告のまとめ

①陸上運動・競技

陸上運動・競技では、ICT 機器を活用する発表がされた。さまざまな動画の比較をすることで、動きの分析をする実践が挙げられた。分析結果から課題を見出し、練習の場を工夫することでねばり強く学ぶ姿が見られた。また、仲間とかかわりあうことで主体的に活動をする姿が見られた実践であった。

②器械運動

ICT 機器や協働的な学びを取り入れた実践が多く発表された。遅延再生装置や動画比較などを活用することで「自分たちには何が足りないのか」という課題と向き合うきっかけとなっていた。また、場の工夫をしながら、スモールステップで練習に取り組んでいける

ような実践が多く見られた。課題として、技や練習の場の選択範囲が広がる分、指導範囲も広がるため安全面に目をむける必要性があるという意見が挙げられた。

③表現

単元の導入として、プロのパフォーマーを呼ぶことで子どもたちにダンスの楽しさを伝え、取り組みやすくする発表がされた。また、豊富なテーマや音楽を取り入れ教員自身が率先して表現を楽しむ姿を見せる実践が紹介された。さらに、ICT 機器を活用することで、動きのポイントを仲間と共有する場が設定され、課題解決へと向かう実践が発表された。

④球技

球技では、子どもたちが思い切り運動したいと思えるような教材の工夫や、身につけた技能をゲームで発揮することができるようにすることを目的とした練習の場やルールの設定など、運動する楽しさや喜びを味わうことをめざした実践が多く発表された。また、ICT 機器を活用し、自分の考えを発信したり、互いの考えを広げたりする活動を通して、仲間とかかわり合うことで、チームの課題を解決したり、自ら学びを深めたりすることができる子どもたちの姿を引き出すことにつながった事例が多く挙げられた。

⑤体づくり運動

体づくり運動では、統計的な活動を通して、新体力テストの記録の向上をめざした実践や、小学校低学年児童の体力および運動能力の向上をめざして、忍者をテーマにした体づくり運動遊びの実践が発表された。また、自己の体力を見つめるために「見える化」「言語化」できるシートを作成する取り組みや、タブレットのカメラ機能とアプリケーション機能を活用し、よりよい準備運動の動きについて共有したり、伝え合ったりする活動を取り入れた実践など、有効的な ICT 機器の活用方法も挙げられた。

⑥武道

武道では、ICT 機器を活用した柔道の実践が発表された。受け身や投げ技のポイントを見本動画で確認することで、正しい受け身の仕方や投げ方を理解できるようにしたり、見本の動きと自分の動きを動画で見比べることで自分の動きの改善点に気づかせたりするなど、主体的・対話的で深い学びの実現をめざした授業展開の工夫が挙げられていた。また、ICT 機器の活用だけに偏らず、技能が向上できるようなポイントを補ったり、認識のずれを修正したりする必要があることが課題として挙げられた。

(3) 討論の内容

① わかる・できる・かかわる体育の授業づくりについて

わかる・できる・かかわる体育の授業づくりを行うためには、ICT 機器の効果的な活用と確かな技能向上が必要である。そのために、ICT 機器を使う際は、手本や友達の動きの視点を明確にすることで、違いを比較したり共通点を見出そうとしたりするなど、対話がより活発になり、正しい知識を習得することができると意見が出された。また、確かな技能向上にむけて、上手な子が先生役となって教えること、子どもたちにとって必要な場面で教員が適切な支援を行うことが大切だという意見が出された。

② ねばり強く学ぶことをめざした教材や指導方法の工夫について

子どもたちがねばり強く学ぶためには、子どもたちにとって魅力的な教材を開発したり、個に応じた適切な指導支援をしたりすることが大切である。魅力的な教材を開発するために、身体と心が安全である場の設定、身近な教具の活用をしていくことが重要だと意見が出された。また、教員の明確な視点に基づいた前向きな声かけ、意図的なグループ学習、

動きが可視化された学習カードなど指導方法を工夫することで、「もっとやってみたい」とねばり強く学んでいく姿が期待されると意見が出された。

(4) 指導・助言

鈴木 一成 先生（愛知教育大学） 望月 翔太 先生（名古屋市立篠原小学校）

－わかる・できる・かかわることを大切にしたい体育の授業づくり－

「子どもたちのわかる・できるを高めるために、他者とのかかわりをどのようにしたのか」

① 「何が」わかることが大切なのか

- ・学習状況を的確にとらえた学習指導であるか
- ・体育の学びが充実するには、適切な学習内容をふまえた学習活動があるか
- ・わかるための評価情報は、子どもたちにとって利用しやすいものであるか

② 「何が」できることが大切なのか

- ・当該学年の指導内容（主に「知識及び技能（運動）」）の明確化・順序性はよいか
- ・当該運動領域の指導内容（主に「知識及び技能」）の系統化は図られているか
- ・できるための評価情報は、子どもたちにとって利用しやすいものであるか
（ICT 機器の特性に制限される情報ではなく、運動の特性あつての情報であることに留意が必要である。）

③ 「何と（他者・教具・対象）」かかわることが大切なのか

- ・かかわりの中に、体育授業での「対象（学んでいること）」があるか
- ・教員の専門性とは（教科目標への誘発・調整・修正・停止・再出発・選択等）
- ・かかわるための評価情報は、子どもたちにとって利用しやすいものであるか

－ねばり強く学ぶことをめざした教材や指導方法を工夫した体育の授業づくり－

「課題解決にむけて試行錯誤を繰り返しながら、積極的に運動に取り組み続けるための、適切な課題や教材の設定と指導方法の工夫」

④ 「ねばり強く学ぶこと」になる適切な課題をどのように設定するのか

⑤ 「ねばり強く学ぶこと」には、どのような「知識及び技能（運動）」の関連があり、どのような教材を設定するのか

3 今後の課題

本集会では、「わかる・できる・かかわることを大切にしたい授業づくり」の今後の課題として、体育授業では、「わかる・できる・かかわる」ためには、どのように学習改善と指導改善をはかることが大切なのかということが挙げられた。また、子どもたちが学習改善をはかるために利用しやすい評価情報をどのように収集及び提供するのか、それを実現する教員の専門性とは何か、ということも課題として挙げられた。

さらに、「ねばり強く学ぶことをめざした教材や指導方法を工夫した授業づくり」の今後の課題として、「ねばり強く学ぶこと」にむけての適切な課題と教材をどのように設定するかということが挙げられた。

「わかる・できる・かかわることを大切にしたい授業づくり」と「ねばり強く学ぶことをめざした教材や指導方法を工夫した授業づくり」の2つの柱での討論から、主要な課題は次の2点に整理できる。

- (1) 「わかる・できる・かかわる」を深める学習内容の明確化と適切な評価情報の充実
- (2) 「ねばり強く学ぶこと」の具体的な学習状況の把握と課題・教材の設定と配列

4 授業実践（名古屋市立榎小学校 佐藤健介）

1 どのような児童を育てたいか

わたくしは、児童の思考力・判断力が高まる体育の授業をめざしている。そうした体育学習を経験した児童は、どのようにしたら課題を解決することができるようになるのかを積極的に考えるようになり、その積み重ねが予測困難な時代においても、豊かな人生を切り開くことのできる資質・能力の育成につながると考えるからである。

その中でもボール運動は、とりわけ瞬間的な思考力・判断力が求められる運動領域である。「得点を決める」「相手の得点を防ぐ」などの大きな目標に向かって、その瞬間に自分は何をすべきかを考えたり、自己の運動経験から方法を選択して判断したりする必要がある。しかしながら、ボール運動の学習は、経験の有無がボール操作技能に直結し、児童によってボール操作技能に差があるために、ゲームで本来学ぶべき思考力・判断力の育成につながらないという難しさがある。

そこで本実践では、技能差にかかわらず誰もが参加しやすいゲームを設定し、まずは学習課題の解決方法を見つけやすくしていく。それにより、児童は学習過程において、試行錯誤し、課題を解決するために、思考・判断することができると思う。その上で、ゲームから気付きを促し、ゲームにおいて繰り返し試行錯誤することができるように、ゲームを中心に据えた学習を展開する。工夫された多くのゲームを経験し、振り返る活動を繰り返していくことで、状況に応じたさまざまな解決方法を思考・判断することができると思う。

以上の本実践での重点事項を通して、ボール運動における児童の思考力・判断力を高めていきたい。

2 学年・領域（単元）

(1) 学年 第1学年

(2) 領域（単元） ボールゲーム（たいけつゲーム）8時間完了

3 授業づくりにおける基本的な考え方

(1) 単元末に期待される具体的な児童の姿

ゲームに繰り返し取り組む中で、どのようにしたら得点を取ることができるのか、またどのようにしたら得点を防ぐことができるのか、試行錯誤しながらチームの仲間と協力して、状況判断をしながらゲームに楽しく取り組む姿。

(2) 単元末に期待される具体的な児童の姿に迫るための授業の考え方

ボール運動は、刻々と変わる場面の状況に応じた思考力・判断力が求められる。そして、ボール運動では、「得点を決める」または「相手の得点を防ぐ」ことが最大の面白さであり、その勝敗を競うことが運動特性であると思う。

それにより、チームが勝つために、自分やチームで何をすべきかを考えたり、どうするとよいか判断したりすることが求められる学習単元である。そのためには、児童自身がゲームに必要な動きがわかり、気付く必要がある。

そこで、ゲームから気付きを促し、ゲームに必要な動きを高めることができるように、単元を通してゲーム中心の学習を展開していく。また、小学1年生の実態を考慮して、ボールゲームにおけるゲーム理解をできるだけわかりやすくすることと、状況判断をできるだけ易しくする必要がある。そのため、攻守入り交じるゲームではあるが、攻守の区別がわかりやすいゲームをしくむこととする。

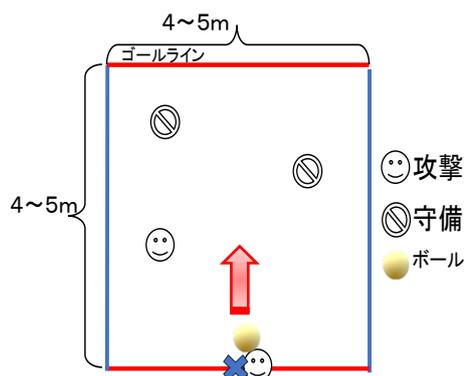
(3) 授業の具体

ア どの児童も参加しやすいゲーム設定

とりわけ思考力・判断力が求められるボールゲームでは、ルールが複雑になりすぎると、状況判断を難しくさせ、ゲームで何ができるようになるとよいか、わかりづらくさせてしまうことがある。また、技能差がゲーム経験に大きく影響を与えるため、ボール操作技能が苦手な児童にとっては、ボールに触れる機会を少なくさせてしまうことも予想される。そこで、必然的にボールにかかわる機会を保障するためにゲームの人数を攻め、守りとも最小のユニットの二人とする。攻めも守りも同数ではあるが、いかに守りをかわしてシュートまで持ち込むことができるのかをゲームの面白さと考えた（児童の必要感に応じて守りを一人とすることも可）。また、このボールゲームの経験が中学年以降のボール運動に役立つと考え、自陣のコートから守りをかいくぐり、相手の陣地へボールを運ぶ、「ボールをこっち（自陣）からあっち（敵陣）へ」という発想の基、ゲームを設定する。それにより、どの児童でもいち早くゲーム理解ができ、ゲームに楽しく参加することができると思う。また、チームで攻め方や守り方を考えながらとりくむことができると思う。

たいけつゲームの行い方

- ・ 攻めと守りの人数を2人対1～2人とする。
- ・ 攻めは1分30秒。時間内であれば、何回でも攻めてよい。
- ・ 攻守交替の表裏2回。
- ・ ボールが向こう側のラインを越えたら1点。
- ・ 攻めの一人は、手前のラインに立ち、スタートする。シュートかパスをした後に、攻めることができる。
- ・ 攻めの一人は、始めからコート内に入る。
- ・ 基本的には、パスだけでつなぐゲーム。ボールを保持したときは、ある程度の歩数は許容する。



イ 教具の選定

ボール運動では、使用するボール（教具）も、児童の思考力・判断力を高めることができるかの大きな要因となる。そこで、児童のボール操作技能の緩和や怖さ、痛さの軽減のため、捕りやすく、投げやすく、直接当たっても痛くないボールを採用することとする。こうしたボールを採用することで、ボールが当たるかもしれないという恐怖心や、捕ったり投げたりすることへの不安感が軽減され、児童が学習活動（ゲーム）に没頭することができると思う。

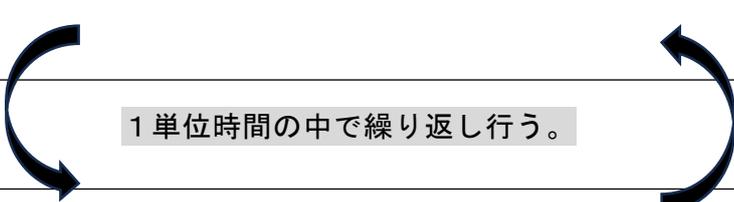
ボールの特徴

- ・ ボールの直径は17cm、重さは約50gのスポンジ素材。
- ・ 軽量で、伸縮性があり低学年の児童でも握りやすく、投げやすい。
- ・ 顔や体に直接当たっても痛くないため、怖さを軽減できる。



(4) 指導と評価の計画

単元目標	知識及び技能	ねらったところにボールを操作し、得点することができるようにする。ボールが飛んだり、転がったりするコースへの移動ができるようにする。 ボールを操作できる位置への移動ができるようにする。
	思考力、判断力、表現力等	得点をするための方法、得点を防ぐための方法を考えることができるようにする。状況に応じて、考えた攻め方や守り方を選択することができるようにする。 考えたことを友だちに伝えることができるようにする。
	学びに向かう力、人間性等	ボールゲームにすすんでとりくむことができるようにする。 規則を守り、誰とでもなかよく運動をすることができるようにする。また、ボールゲームの勝敗を受け入れることができるようにする。

		時数	1	2	3	4	5	6	7	8	
学習過程	10	準備運動・本時のめあての確認									
	20	たいけつゲーム <ul style="list-style-type: none"> 表裏2回行う。(各1分30秒ずつ) 攻撃側の二人はどちらがボールを持ってスタートするのかを決める。 									
	30	 1 単位時間の中で繰り返し行う。									
	40	ゲームの振り返り (攻撃) <ul style="list-style-type: none"> どのようにすると得点することができるのか。 次はどのような攻めを試してみるか。 (守備) <ul style="list-style-type: none"> どのようにすると得点を防ぐことができるのか。 次はどのような守りを試してみるか。 									
		本時の振り返り・次時の確認・整理運動									
単元の評価規準	知	① ゲームの行い方を理解している。 【動きの理解】									
	技	② ねらったところにボールを操作し、得点することができる。 【ゲームの観察】 ③ ボールが飛んだり、転がったりするコースへ移動し、得点を防ぐことができる。 【ゲームの観察】									

	思	① 得点をするための攻め方、得点を防ぐための守り方を考えている。 【ゲームの観察】【感想の記述】								
	態	② 考えた方法を、同じチームの友だちに伝えることができている。 【ゲームの観察】								
数	時	1	2	3	4	5	6	7	8	
	評価機会	知	①	①	①					
		技		②	②	③	③	③		
		思		①	①	①②	②	②	①②	①
		態	①		①		①		②	①

4 児童の学びの過程

第1時



はじめて経験するボールゲーム。どのチームも、味方は一人いるが、それよりもボールを持ったら自分が何とかしようと、考えながら挑戦していた。

このゲームで大事なことは、まずシュートをねらうこと。よしよし、いいよ！

教員

第2時





第3時



第3時になると、守りも前や後ろで守ったり、ボールを持っている子に近付いてぴったり守ったりして考えながらゲームをしているよ。

教員



攻めのチームが、様々な工夫を凝らして得点する場面が増えてくることで、第3時から、守りの工夫が見られるようになってきた。

具体的には、二人の守りのうち、一人がゴール前、もう一人がボール保持者に密着マークと役割を分担して守ろうとする姿が見られるようになった。



ボールを持っていない子がすぐにゴール近くに向かって走ろうとする姿が多くのチームで見られた。しかし、守りもボールを持っている子に対して、二人がかりで守ったり、フリーな相手を見つけて守ったりするようになり、なかなかシュートができずにいた。
 ボールを持っている子は、相手を振り切るために、左右に切り返しながらかシュート、もしくはパスをするコースを探している様子が見られた。

第4時



教員

おっ、走りながら味方呼んでいるぞ。あとは、キャッチだけだ。さあ、どうかな。おいしい！（このとき、キャッチは成功せず）キャッチが成功していたら、シュートチャンスだったね。でも、いいよ、いいよ！

第5時以降



第1時から全10チーム中、7チームが攻めと守りを2対2でゲームをしていた。第4時以降は、全てのチームで、攻めと守りを同数にしてゲームをする様子が見られた。攻め側は守りをかわすために、攻め方のサインを決めているチームもあった。また、一度ゴール前まで行っても、もう一度ボールをもらうために、味方の近くまでもらいにいくなど攻め方を工夫していた。

5 まとめ

(1) 総ゲーム数と総ゲーム時間について

本実践における総ゲーム数と総ゲーム時間は、以下の表の通りである【資料1】。

	第1時	第2時	第3時	第4時	第5時	第6時	第7時	第8時	合計
ゲーム数	2	3	4	4	5	5	4	4	31
時間 (1ゲーム6分)	12分	18分	24分	24分	30分	30分	24分	24分	186分

【資料1：本実践における総ゲーム数と総ゲーム時間】

第8時までには、全チームが合計31ゲームをこなし、ゲーム時間は、合計186分になった。中でも、第2時以降からは、すべての児童がゲームの度にシュートすることができるようになっていた。以上のことから、活発な攻防が起こるゲームを数多く経験することは、児童のゲーム理解とゲームの質を高めることに有効であると考えられる。

(2) 単元終了後のアンケートの結果について

アンケート結果の分析から、シュートすることができるのは、どのようなときかの問いに、「相手が近くにいないとき、相手が見ていないとき、相手が油断しているとき」など、22人中21人の児童がいつシュートするとよいか気付くことができた【資料2】。中には、「相手をかわす、だます」という記述も見られた。

また、パスをするときはどんなときかの問いに、「相手が前にいたとき、囲まれたとき、仲間がパスと言ったとき」など、18人の児童がいつパスをするとよいか気付くことができた【資料2】。

このことから、児童がゲームにおいて、置かれた状況を何とか打破しようと思われ、判断をしながらゲームにとりくんでいたことがわかった。

どんなときに シュートが うてましたか

回答番号	記述内容(原文ママ・漢字カタカナは変換)
1	・相手が違う方向を向いているときに素早く入れる
2	・人が前にいないとき。・横から投げられるとき。・相手が前にいても、ボールを上げてパスをすることができるとき。
3	・ボールをキャッチしたらすぐに投げられるとき
4	・ゴールの前で投げることができるとき
5	・相手がいないとき。 ・始めの所から、右側の人にパスをする。その後左側にパスをして通すことができたから、シュートが入る。
6	・ゴールの近くに入れることができたとき。・相手がこちを向いていないとき ・相手がいないとき
7	・前に誰もいないとき
8	・相手が見ていないとき。・相手が後ろを見てたとき。
9	・人がいないときにすぐ投げて、点を入れる。
10	・パスしてシュート。・だましてシュート。・投げてシュート
11	・相手が、間をあけているとき。・自分の狙いじゃないところでだましてから、狙ったところに入れる。・相手が「いえーい」としゃべっているとき。
12	・守りがいるときに、横と横の間に入れる。
13	・相手が前にいない時。・ゴールに近い所で入れる。・だましてから入れる
14	・敵がいないとき。・パスがうまくいったとき
15	・相手が2人になったら、ジャンプしながらボールを入れる
16	・相手がいないとき。・相手が「やった!」って言っているとき。・作戦を考えたととき ・違う方に投げようとして、本当の方に投げるとき
17	・守りの人がいないときにシュートできる
18	・守りに、ボールをあてようとして、味方にパスしてシュートする
19	・目の前に相手が見ていないとき。・スタートからパスをして、ゴールの近くに行けたとき
20	・相手の間が空いているとき
21	・右か、左にいるとき。・敵をかわしたとき
22	・相手がいないとき

パスをするときは どんなときですか?

回答番号	記述内容(原文ママ・漢字カタカナは変換)
1	・邪魔されるとき。・相手に囲まれているとき
2	・囲まれたらパス
3	・みんなで楽しくやるために、パスしないと仲間がやりたくないと思ってしまうからパスをする
4	・遠い所にいると点が入らないからパスをする。 ・前に行けないとき。・相手がゴールの近くにいる時。
5	・相手がいるからパスをする。
6	・前に敵がいるときにパスしてシュートをする。
7	・敵が近くに来て入れないとき。・仲間が「パス」って言ったとき ・相手がたくさん邪魔してきたとき
8	・相手が見ていないとき
9	・相手がすぐ邪魔をするとき
10	・守りが自分のところにきたらパスをする
11	・最初のとき
12	・相手が近くにいないとき
13	・相手に囲まれたとき。・相手に攻められたとき。・相手が横に広がったとき ・相手の一人がゴールの近くに行って、もう一人が近くにきたとき
14	・邪魔する
15	・敵が前にいないとき
16	・敵が真ん前にいるとき。・ゴールが遠いとき。・どうしても点が入らないとき ・シュートをするふりをして、パスをする。そして、もう一回シュートをする。
17	・相手に囲まれたとき
18	・パスを最後にすることができて、僕は嬉しかった
19	・一緒にチームにパスパスって言われたとき
20	・ジャンプしながら打つ
21	・敵がいっぱいになったときにパスをする。
22	・邪魔をされたとき

【資料2：児童のアンケート回答内容(シュート、パスに関する質問)】

(3) 今後に向けて

本実践では、相手の守りが攻めを上回る場面もあった。今後は、必要に応じてうまくいった攻め方を共有する場面を、効果的に取り入れていきたい。また、系統性を考えたゲームを設定することで、ボール運動における思考力・判断力の高まりをめざしていきたい。

II 保 健

1 はじめに

「生きる力」を育むための「ゆたかな学び」をめざし、子ども一人ひとりに「学ぶ喜び・わかる楽しさ」を実感させながら、創意あふれる教育をすすめていくことが求められている。保健分野においては、「健康価値を認識し、自らの課題を見つけ、健康に関する知識を理解し、主体的に考え、行動し、よりよく課題を解決する」資質や能力の育成を重視し、学校・家庭・地域との連携を大切にしながら、研究を推進している。

保健に関する基礎・基本とは、健康に対する現代的な課題に適切に対応し、生涯にわたり健康で活力ある生活を送るための心や体を育むことである。そのために、毎日を健康に過ごせるような実践力を身につけさせていく。また、「生きる力」をのばすために、自ら学び、自ら考え、主体的に行動する力を育てたい。そのてだてとして、子どもが自ら課題を見つけ、解決の方向を見出していく力を育むための指導・支援のあり方を考えたい。そして、保健体育や家庭科、理科や社会など他教科や総合学習との関連や学校・家庭・地域が一体となったとりくみを充実させていく。子どもの健康課題を解決するためには、個人の責任にするのではなく、健康行動に結びつくための知識や情報提供などの教育的な働きかけと、健康的な生活を支えるための環境づくりを組み合わせ、健康的な生活を実現できるようにするという、WHOが提唱するヘルスプロモーションの理念をもとに、実践にとりくんでいく必要がある。

2 教育研究愛知県集会について

(1) 概要

第11分科会保健体育（保健）には12本のレポートが寄せられ、熱心な討論が展開された。第73次教研の課題をふまえ「子どもが生活の主体となるための保健教育」を追究し、「指導方法・指導形態の工夫」「心・命・性に関すること」「生活にいきる保健教育」「保健・総合などでの指導のすすめ方」の4つの柱に沿って実践報告が行われた。

実践内容の傾向として、さまざまな健康課題に対応するため、教材・教具を工夫した実践や、体験を通して自分事としてとらえることのできる授業実践、計画的・継続的に集団および個別にアプローチした実践などが報告された。

また、実践報告後には以下の研究課題に沿って研究協議が行われた。

- ①子どもが主体的に学ぶためのてだて
- ②校内の連携・協力体制づくり
- ③日常生活における行動化を促すためのてだて、および家庭との連携
- ④実践に対する評価方法

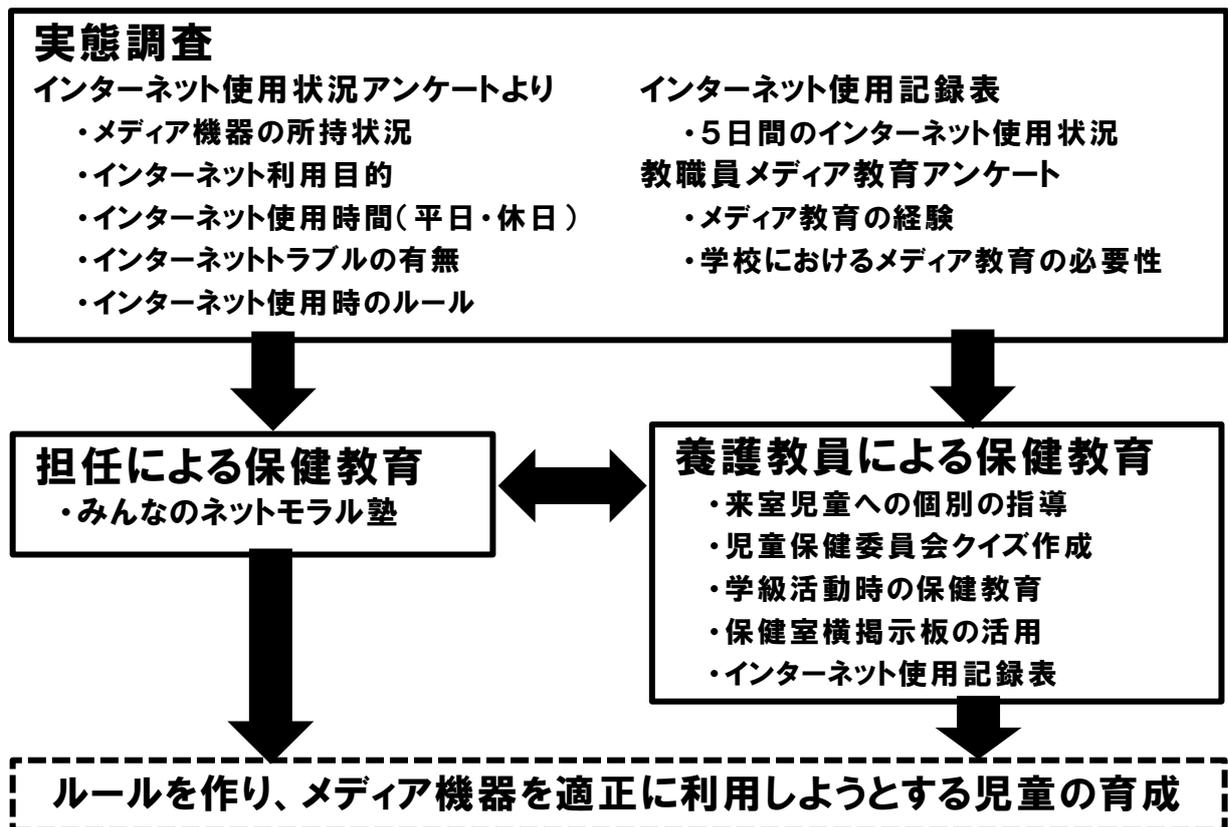
(2) 報告と討論のまとめ - 県教研レポート -

① 指導方法・指導形態の工夫

根拠にもとづいた指導に加え、子ども発案の企画を生かし楽しみながらメディア使用時間の軽減をめざした実践（豊田）や、担任と連携して情報モラル教育に組んだ実践（刈谷〈資料1〉）、学校歯科医との連携や染め出しで視覚的に変化をとらえさせ

た実践（岡崎）、心の健康とメディア使用を関連させた実践（西尾）が報告された。
 討論では、子どもが主体的に学ぶためのてだてについて話し合われた。自分と事例を比較したり、ICT機器を活用して視覚化したりすることで自分事としてとらえさせることや、前向きな気持ちでとりくむための仕掛けを工夫することが有効であるとの意見が出された。

【研究の計画】



令和5年	5月	インターネットの使用状況アンケート	4 - (1) ①
		教職員メディア教育アンケート	4 - (1) ②
	6月	インターネット使用記録表	4 - (1) ③
	7月	児童保健委員会クイズ作成	4 - (3) ①
	9月	みんなのネットモラル塾	4 - (2)
10月		学級活動時の保健教育	4 - (3) ②
		インターネット使用記録表	4 - (3) ④
	11月	評価	

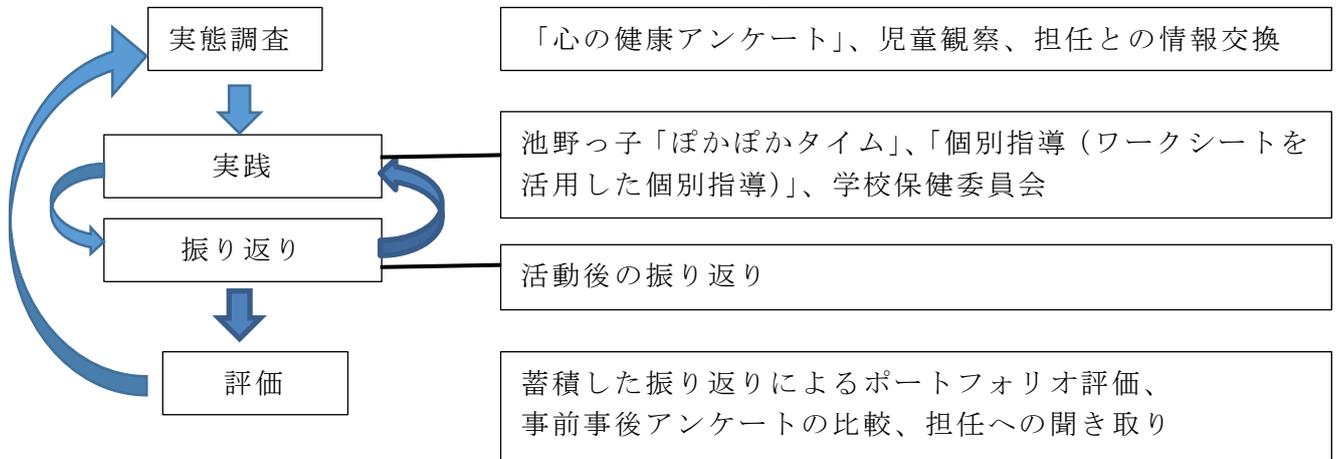
〈資料1〉(刈谷 住吉小)

② 心・命・性に関すること

全校縦割り班での異学年交流と保健室での個別指導を併用して行ったコミュニケーションスキルの向上をめざした実践（尾北〈資料2〉）や市内小中学校が共同で研究し

た「生と性のカリキュラム」にとりくんだ実践（小牧）が報告された。

討論では、校内の連携・協力体制づくりについて話し合われた。管理職や担任・保健主事を巻き込んで健康教育を行う必要性や、タブレット教材を作成し担任がとりくみやすくするてだてについて意見が出された。



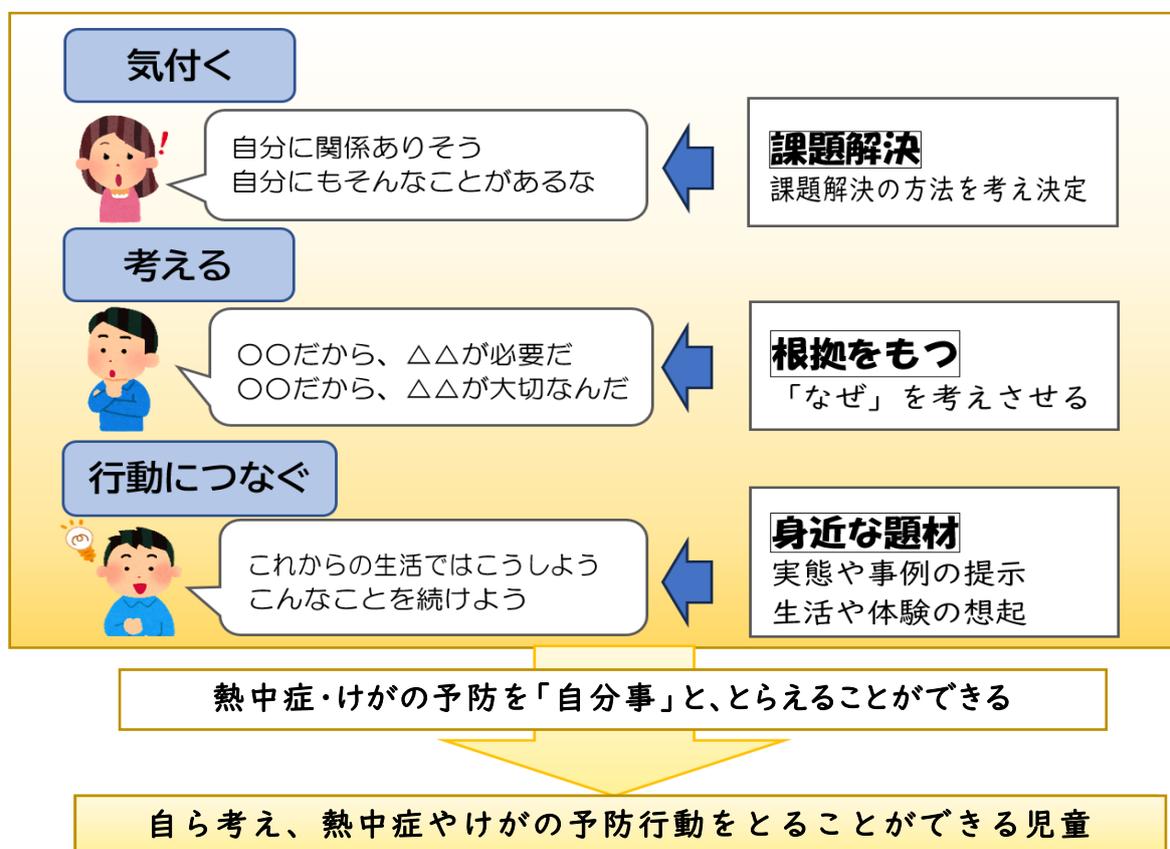
4月	実態調査	・児童対象「心の健康アンケート」4・5・6年生対象 担任との情報交換。	
5月	実践	・池野っ子「ぼかぼかタイム」① 学級で活動し、活動ごとに感想を記入する。	
6月		・第1回学校保健委員会「3つの話し方」 アサーションの基礎になる3つの話し方についての知識を得る。 児童保健給食委員会を中心にすすめ、児童の実践意欲の向上をはかる。 ・池野っ子「ぼかぼかタイム」②③	
7月		・池野っ子「ぼかぼかタイム」④	
9月		・池野っ子「ぼかぼかタイム」⑤ 学級での活動のまとめ。	
10月		評価	・第2回学校保健委員会「自分も相手も大切にするコミュニケーション」 外部講師を招き、より具体的なスキルを学ぶ。 ・池野っ子「ぼかぼかタイム」⑥ 全校縦割り班での活動をスタートする。 ・児童対象「心の健康アンケート」4・5・6年生対象（中間評価）
11月 ～ 2月	実践	・池野っ子「ぼかぼかタイム」⑦⑧⑨⑩⑪	
適時		・個別のアサーショントレーニング 頻回来室児童に、ワークシートを使用して適時指導する。	
3月	評価	・蓄積したワークシートによるポートフォリオ評価 ・事前事後アンケートの比較 ・担任へ活動振り返りアンケート	

〈資料2〉（尾北 池野小）

③ 生活に生きる保健教育

熱中症やけがについて得た知識をもとに、適切な処置方法や予防行動を考え、判断・行動できる子どもの育成をめざした実践（名古屋〈資料3〉）、けがが治るしくみを理解し、適切な手当を判断し、日常生活で行動できるようにすることをめざした実践（名古屋）、子どもが自分の健康上の課題を考え、解決・改善し、習慣化をはかろうとする子どもの育成をめざした実践（稲沢）が報告された。

討論では、日常生活における行動化を促すてだて、および家庭との連携について話し合われた。課題を自分事としてとらえたり、行動を定着させたりする工夫や、保護者が一緒にとりくめる生活点検カードの活用、継続した働きかけと積み重ねが大切であるなどの意見が出された。



〈資料3〉（名古屋 徳重小）

④ 保健・総合などでの指導のすすめ方

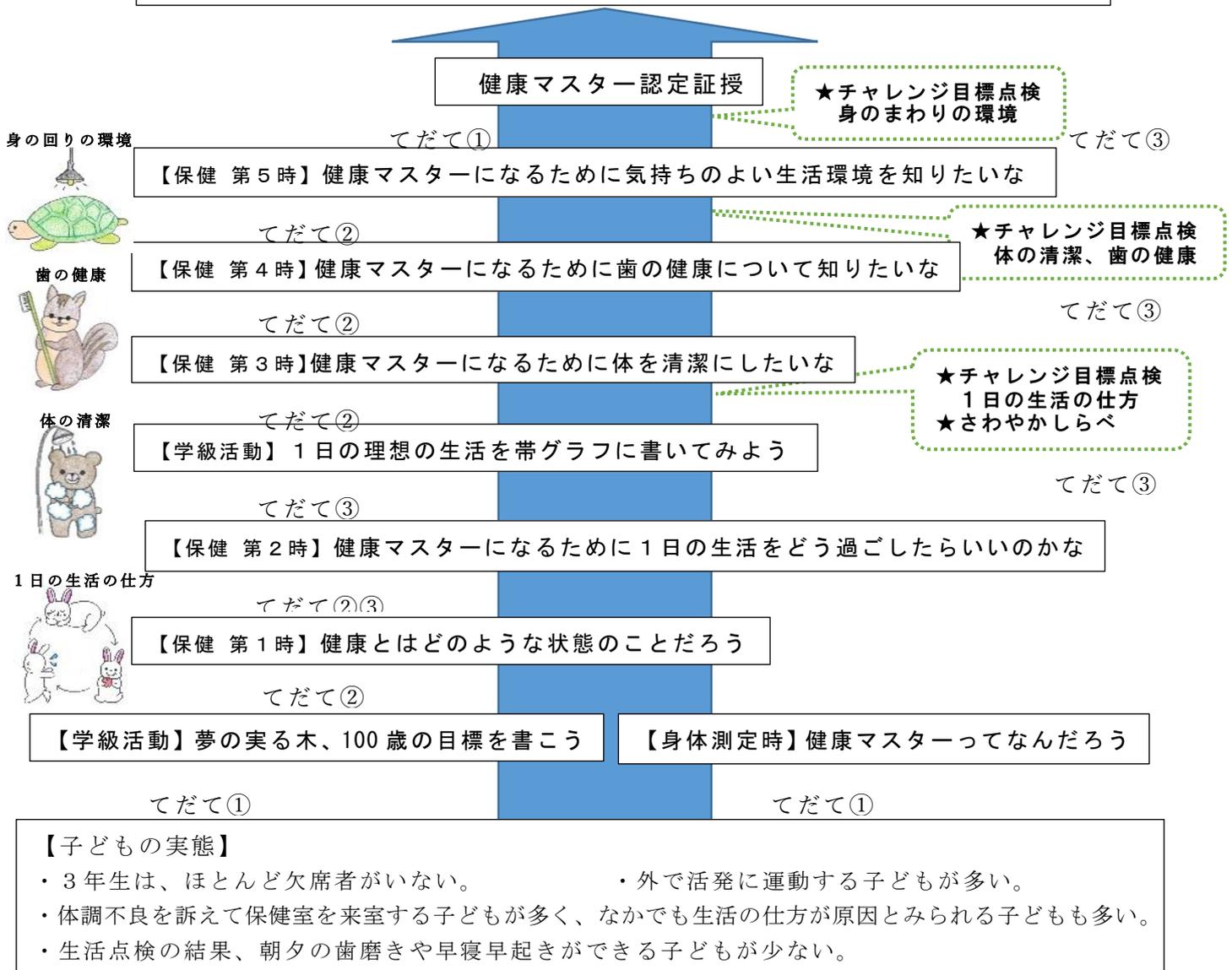
担任やSCと連携し、教科保健や児童保健委員会活動、個別の支援を行い、自他ともに大切にできる児童の育成をめざした実践（一宮）、計画的に教科保健と総合的な学習や学級活動を関連付け、単元を通して主体的に健康な生活ができる子どもの育成をめざした実践（豊橋〈資料4〉）が報告された。

討論では、実践に対する評価方法について話し合われた。ICTの活用やアンケート項目の工夫、記述からキーワードを拾うこと、また他者評価を得る必要性など、具体的な意見が出された。

めざす子ども像

- ・健康への関心を高め、理解を深められる子
- ・主体的に健康な生活^{※1}ができる子

※1の「主体的に健康な生活」とは、本研究では自分の健康課題を発見し、課題解決に向けて他者とのかかわり合いの中で解決策を見つけ、実践できる子と定義する。



〈資料4〉(豊橋 天伯小)

(3) 指導・助言

黒岩 知里 先生 (江南市立古知野東小学校)

「指導方法・指導形態の工夫」

情報化社会を生きていく子どもたちには、情報モラル教育が必須である。ネット利

用は低年齢化しているため、小学校低学年から情報モラル教育を行えるように、すでにあるものを活用して学校全体でとりくめる年間計画を作成するとよい。メディア利用のルールは、親子で話し合っ決めてと守りやすくなる。また、定期的にルールを見直すことも大切である。

授業では、発問の工夫が大切だと言われている。思わず考えてしまう発問や仕掛けをすることで、子どもたちの思考は深まっていく。チェック期間は長過ぎるとマンネリ化してしまうため、2週間やるのであれば1週間で1回振り返りをして、課題やめあてを見直す機会をもつとよい。学校だけでなく家庭でも積極的に歯みがきができる子どもの育成をめざした実践では、自分の歯と口の健康を守っていこうという意欲に、気持ちよさを感じられる体験を合わせた指導をしたことで、行動の習慣化につながった。また、個別指導で一人ひとりの苦手を養護教員と一緒に確認することで、目標がより具体的になった。

「心・命・性に関すること」

コミュニケーションスキルについての実践では、実態把握から評価までの年間計画が立てられていることで他教員の理解を得やすくなり、学校全体でのとりくみにつながっていることがすばらしい。活動の場を学級から縦割り班へと広げたことで、コミュニケーションの場が増えるだけでなく、異学年交流を通して人とかかわる喜びを育むことができた。特に高学年の子どもたちにとっては、低学年の子どもたちとのかかわりを通して「人の役に立った」「人から認めてもらえた」など人とのかかわりの中でこそ育まれる自己有用感の高まりにつながった。自己有用感の高まりは、自己肯定感を高めていくことにもつながるため、異学年でのとりくみも続けてほしい。

「生活にいきる保健教育」

けがの痛みスケールは、自分の状態を正確に伝えるスキルの獲得だけでなく、可視化することで子どもたちの安心感にもつながっている。けがが治るメカニズムを知らせることや、5年生体育科保健領域においてけがの状態を判断し適切な手当を考えることは、これからの自分の体を守っていくことにつながる。

熱中症予防の実践では、実際に頭の表面温度を測るという実験をすることで学びを裏付け、計測した子どもだけでなく測定された子どもやそれを周りで見ていた子どもも「なるほど」と感じられたと思う。その結果をもって呼びかけや帽子持参チェックをすることで、行動化を促したり子どもたちどうしの学びにつなげたりすることができた。

5年生保健科体育領域「けがの予防」の授業では、行動要因と環境要因に焦点をあて、防止策を含めて共有して考えることが成果につながった。意識の継続は難しいが、行事や学級活動と関連付け、子どもたちに何度も意識させることが必要である。

部活動の安全についての実践では、事前に撮影した部活動の様子を視聴したことで自分事として意識を高め、実際にけがを予防するための知識や技能を生徒が習得することにつながった。体育科の授業の体づくり運動とつなげたり、体育科の先生方の知識もいただいたりしながら実践していくとより深まるだろう。

「保健・総合などでの指導のすすめ方」

実態把握・課題・てだて・評価まで計画的にすすめられている点がすばらしい。特に野外学習という集団としても個人としても大きく成長できる行事と心の健康教育を関連付けて実施したことや、他の教員やS Cと連携したとりくみが成果につながっている。「豊かな心部会」という健康教育をすすめていくうえで協力を得られる組織があることはとても心強い。これからも部会と協力しながら継続してほしい。

生活習慣についての実践では、最初の授業で何を学ぶのか見通しをもたせることで興味や関心を高めて、自分事としてとりくませることができた。また、視覚的に訴えたり体験的な活動を取り入れたりすることで実感を伴った学びにつながった。

浅田 知恵 先生（愛知教育大学）

研究協議①主体的に学ぶためのてだて

○課題の見える化

歯垢の染め出しの様子を観察したり、メディアの利用実態を記録したりするときに、「自分たちのどこが課題で、何をどう変えていくのか」を考えさせるために、ICTをていねいに活用していた。ICTの活用は課題を見つけるだけでなく、変化を見ていくうえでも効果的だった。

○他者との比較

小学校高学年や中学生は、自分だけでなく他の子との違いに関心をもつ時期であるため、上手に他者との違いに気付かせていくことで、自分なりにさらによくしていきたいと思わせる工夫ができる。

○家庭との連携

家庭においても自分事として受け止めてもらうことが重要である。そのために、家庭を巻き込んでいくてだてを工夫していくことが大事である。

○子どもが前向きに楽しくとりくむ仕掛け

楽しみながらだと続けられる。

○養護教員として、養護教員だからこその視点

心と体の健康という視点は、養護教員だからこそだと思う。さまざまな背景をもつ子どもと保健室でかかわり、個別の指導・支援もあわせてやっていくからこそ、集団と個別という意味がある。

研究協議②校内の連携・協力体制づくり

③日常生活における行動化を促すてだて、および家庭との連携

担任の先生方はクラスの子どもたちをよく見ているし、子どもたちへの思いをもっているのだから、「〇〇をやってください」よりも「こういう子たちを育てたいけれどどうしたらいいでしょう」というように、一緒に考えていくとヒントをたくさんいただけて、一緒にやっていける。保護者に対しても同じで、保護者の心配も受け止めながら一緒に心配していくと、相手の心が動いていく。保護者の心を動かすような働きかけが大事である。SCやSSWがさまざまな形で学校に入っているが、そうした方たちと連携していくときも、一緒に相談していったり、アドバイスを受けるような形で話をしにいったりしてかかわっていく。その後の対応が大事で、子どもや保護者の様子を見ていねいにみていき、経過や変化についてフィードバックする。そういう日々の積み重ねで連携協力体制ができていく。

行動変容ステージモデル（無関心期・関心期・準備期・実行期・維持期）の維持期にもっていくことが難しいため、ご褒美や仕掛けが必要である。また「やめたとしても、気付いたら直せばいいし、いつでも再出発すればいい」ととらえ働きかけていく。

研究協議④実践に対する評価方法

他者（教職員・保護者）から得た評価や子どもたちの実態から「自分の実践がどうだったか」「めざす子ども像に迫れたか」「仮説はどうだったか」など、さまざまなところから評価し振り返っていく必要がある。質的に見ていくこと（子どもの姿など）も、量的に見ていくこと（アンケートなど）も大事である。

全体を通して

集団への働きかけと養護教員が行う個別の指導を並行してとりくんでいる、あるいは集団指導の後にフォロー的に個別指導を行う、というように集団と個別の両面できりくんでいるところがとてもよい。本年度は、情報モラルやメディアの扱い、アサーションなどのテーマが多く、子どもたちが人とかかわっていくところにさまざまな課題を抱えているのかなと感じた。また、人間関係の困難さや家庭の協力の得にくさなどといった課題を発表の端々に感じた。共通した課題意識を共有できる感性や感覚を大事にしていきたいし、それぞれの地域で話し合っていくことも大事だと感じた。

3 今後の課題

今日、子どもをとりまく状況は、都市化、少子高齢化、情報化、国際化などにより社会環境や生活環境が急激に変化している。特に、近年では、自然災害の発生や、情報化やグローバル化等の社会の変化に伴い子どもをとりまく安全に関する環境も変化している。こうした変化は、子どもの心身の健康状態や健康にかかわる行動に大きく影響を与え、健康課題は多様化かつ複雑化している。

体の面では、近年の都市化、情報化などを背景とした生活環境の著しい変化による体力の低下、肥満の増加、姿勢の悪化、性の多様性やジェンダー平等など多岐にわたる課題が懸念されている。さらに、GIGAスクール構想によるICT教育の加速や、スマートフォンや通信機能のあるゲーム機の長時間使用によって、ICT機器の適切な使い方をふまえた生活習慣、目の健康に関する指導等がいつそう求められている。

心の面では、コロナ禍での生活様式の変化に起因するメンタルヘルスの問題が今なお続いている。人とかかわりが変化したことで、ストレスがかかったり心身のバランスを崩したりしている子どもが増え、そうした心身の不調から不登校の子どもが増加している。このような中でも、心身の健康を自ら保持増進していくために、ストレスへの対処方法や感情のコントロール方法を見出し、乗り越えていく力が必要となる。

これらの多様で喫緊の健康課題を解決するにあたり、保健教育に今後に残された課題としては、子どもが自ら課題を見つけ、解決の方法を見出していく力を育むための指導や、日常生活における行動化を定着させるための校内および家庭との連携の工夫がある。学習指導要領においては、「生きる力」を育むという理念のもと、知識や技能の習得とともに思考力、判断力、表現力など、学びに向かう力、人間性などの育成を重視している。そのため、子どもが生涯を通じて心豊かに健康な生活を送るためには、校内の協力体制はもとより、家庭、地域との連携をはかり、子どもが自ら課題を見つけ、解決の方法を見出していく力を育むための指導や支援のあり方について、他教科と関連付けながら教育活動全体を通して組織的かつ計画的にとりくんでいくことが大切であると考えます。

今後も、実践に対する評価のあり方とともに「子どもが生活の主体となるための保健教育」を追究していきたい。

自分のよさに気付き、自他ともに大切にできる児童の育成
－保健教育や児童保健委員のとりくみによる自己を見つめる活動を通して－

一宮市立開明小学校 千田 美沙

1 主題設定の理由

本校では、2023年度2学期以降、頻繁に遅刻をし、不登校傾向となる児童、友達に嫌われていると感じたり、友達に合わせて疲れてしまったりする児童など、心の問題に起因する体調不良を訴える児童が高学年で増加した。中には、突然教室を飛び出してしまう児童や、呼びかけられたり視線を感じたりすると、「うるさい」「だまれ」「死ね」などと周りの人に言ったり、自分自身の状態を尋ねられると、「うざい」「めんどい」「無理」などと、人も自分も傷つけてしまう言葉を頻繁に使ったりする児童も見られた。

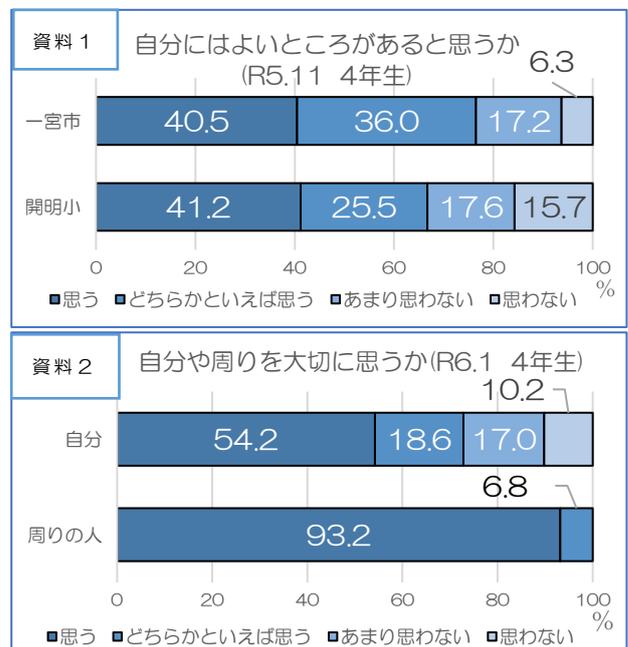
2023年度11月の意識実態調査の結果(資料1)、4年生では「自分にはよいところがあると思うか」という項目に「思う、どちらかといえば思う」と答えた児童が66.7%で、市内の同学年や本校の他の学年より少なかった。

また、この結果をもとに、全校児童を対象に1月に実施したアンケート結果(資料2)から「周りの人を大切に思える」という項目に、「思う」と答えた児童が93.2%だったのに対し、「自分のことが大切だと思える」という項目に、「思う」と答えた児童が54.2%だった。また担任の情報からも、学校生活を穏やかに過ごしている中に、意見が言えず周りに合わせているだけの児童が多くいることがわかった。高学年になると、周り自分と比較し、自分に自信がもてず、自分のことが好きになれないこと、不安さから自分の思いをうまく表現できず、必要以上に周りに合わせて疲れてしまうこと、また、意図せず周りの人を傷つけてしまうことが多くなるからだと考えられる。

そこで本年度、5年生に対して自分自身を見つめる機会を与える健康教育を、担任やスクールカウンセラー(以下SCとする)と連携し実施することで、自分自身を肯定的にとらえ、自分のよさに気付くことができる児童を育てたいと考えた。また、普段の自分の行動を振り返る機会として、児童保健委員の活動を実施することにより、自分の行動が自分自身や相手を大切にしていると実感させたいと考えた。さらに、保健室頻回来室者に対しても、来室時に来室記録をとりながら、自分の感情について考えさせ、困っていることを一緒に整理していくことで、自分自身に向き合い、よりよい行動がとれるようにしていきたいと考えた。

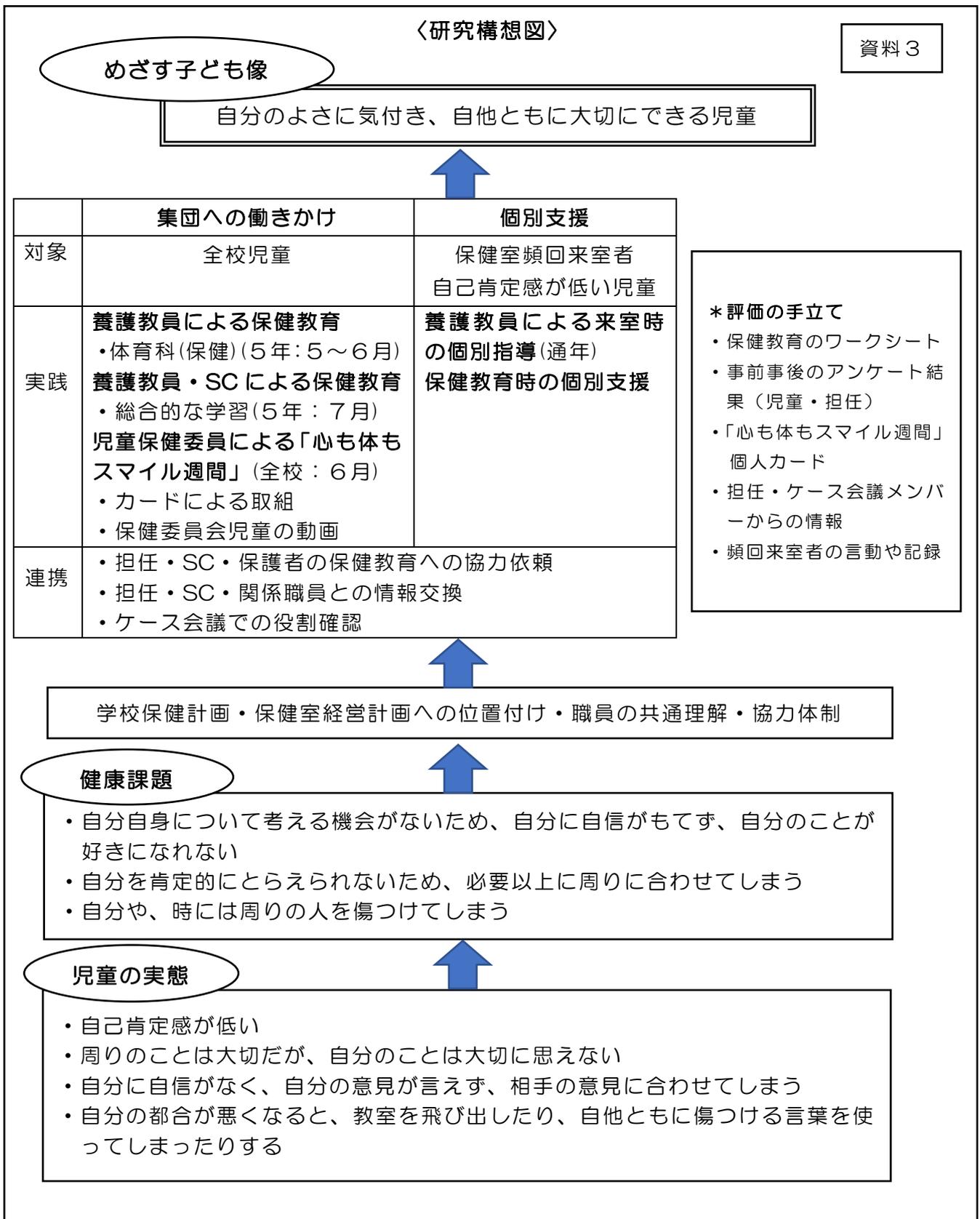
2 研究の仮説

- (1) 担任やSCと連携した保健教育を通して、思春期に起こる心の変化を理解し、自己を見つめることで、自分らしさを肯定的に受け止め、自分のよさに気付くことができるだろう。
- (2) 児童保健委員の活動や自己肯定感の低い児童への個別支援を通して、自分自身を振り返り、自分の行動を価値付けすることで、自他ともに大切にできる行動がとれるだろう。



3 研究の計画

児童の実態をふまえ、研究構想図（資料3）のように計画した。



4 研究の実践

(1) 集団への働きかけ

① 保健教育（5年生）

ア 体育科（保健）「心の健康」実施（5月～6月上旬）

「心の健康」の分野において、自分自身を振り返ることで、自己を見つめる機会を設け、自分自身を肯定的にとらえ、自分らしさを受け止められるようにした。第1時「心の発達」では、日常生活の設定場面において、自分の考え方や行動の仕方を振り返らせ、どんな心を育てたいかを考えさせた。第2時「心と体のつながり」では、自分の「心の天気と体調の健康観察」より自分の心と体の状態に気付かせ、どんな場面でどんな心と体の状態になりやすいかを考えさせた（資料4）。第3時「不安や悩みがあるとき」では、事前アンケートにより、自分の悩みやクラスの子の悩みに気付かせた。また、さまざまな対処法を知り、体験することで、自分に合った対処法を見つけさせた。

【資料4】 第2時「心と体のつながり」ワークシート一部抜粋

① ① 自分心の天気と体の関係を見よう。

<心の天気>	<体調・体の様子>
	糸色好調
	気持ち悪いだわ
	お腹が痛い
	頭が痛い

② 心や気持ちの変化

体の調子がいいとき	(例)
	うさぎさする 動くたい 早く学校に行きたいな
適度な運動をしたとき	おなかはずく もっと運動したい 楽しい うれしい 元気
体の調子が悪いとき	
	食よくない おな 悲しい テレビが見たい 幸せ

イ 総合的な学習 「認め合おう 自分のよさ 友達のよさ」（7月）

養護教員とSCによるソーシャルスキルトレーニングを取り入れた授業を、野外教育活動前に活動班にて行った。SCからは、「よい仲間、よい話し合いとは」という視点で、自分の意見や意思を表現することができるよう、お互いに尊重し合う、最後まで人の話を聴く、うなずいて聴くなど、よい話し合いをするためのスキルを助言してもらった。

また、話し合い活動では、「自己PRタイム」や「選ぶならどっち」をし、自分自身を見つめさせたり、意見を伝え、認め合ったりする活動を行った。保護者には、事前に児童への応援メッセージを依頼し、授業の最後に代読した後、廊下に掲示した。

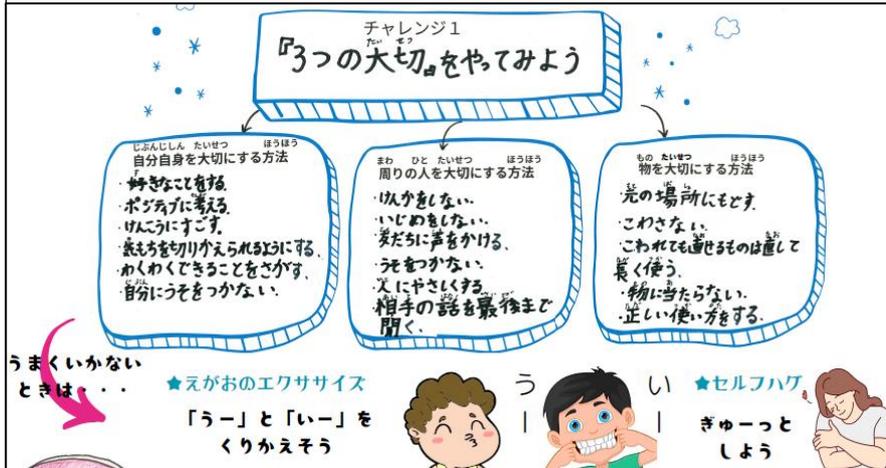
授業後は、授業の様子や授業内容をたよりにして、児童に配付し、保護者には小中学校むけ保護者連絡ツール（テトル）で配信することで、家庭でも授業の振り返りができるようにした。

② 保健委員会児童による「心も体もスマイル週間」のとりくみ（6月）

本校の重点目標である「3つの大切」（自分を大切に、周りの人を大切に、ものを大切に）ができる子、「7つの魔法の言葉」（おはようございます、こんにちは、ありがとう、おねがいします、ごめんね、いいよ、さようなら）をすすんで使える子を実現できるようにとりくみを行った。

ア 「3つの大切」についてのとりくみ

「3つの大切」については、どのような行動がそれぞれを大切にすることにつながるのかを、保健委員会で話し合い、お知らせ（資料5）や動画を作成した。それをもとに、各学級で指導後、学級または個人でめあてを設定し、個人カードに記入して、1週間の自分の行動を振り返るようにした。



イ 「7つの魔法の言葉」についてのとりくみ

本校が推進している「7つの魔法の言葉」は、「友達となかよく過ごせる言葉」として児童が認識しているが、7つの言葉をすべて知っている児童は、38.2%だった。そこで、「7つの魔法の言葉」について各学級で呼びかけをし、意識して使うことで完成する掲示物を作成した。また、児童保健委員が作成した動画の中で、SCを紹介し、「言葉の力」についてインタビューを行ったり、明るい言葉を使ったりするよう呼びかけた。

(2) 個人への働きかけ

頻回来室者に対して、来室カードの裏面（資料6）に「心の天気」や「感情のラベリング」を追加し、今の気持ちと向き合えるようにした。

また、その感情になった理由を一つ一つ聞いていくことで、児童が何に悩んでいるのかを受け止め、どうするとよいのかの具体策を考えた。

また、カードは担任および内容に応じて、学年の主任、管理職等とケース会議を開き、情報共有し、役割分担を確認することで、組織的な支援や適切な対応ができるようにした。



5 結果と考察

(1) 集団への働きかけ

① 保健教育（5年生）

ア 体育科（保健）「心の健康」

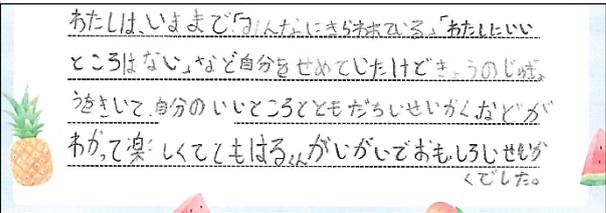
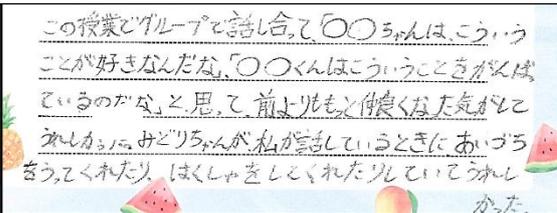
ワークシートの記述（資料7）や児童の発言から、自分自身の心が成長していることや自分の心と体の状態、不安や悩みなどの自分の特徴を知り、誰にでもあることとして、前向きにとらえることができた児童が多かった。特に、不安や悩みの対処法では、グループでの話し合い後、全体交流したことで、授業前と比較して自分に合った対処法をたくさん記述できる児童が多かった。このことから、自己を見つめる活動を取り入れたことで、思春期の自分自身に起こる心の変化を理解し、その変化を成長ととらえ、他の児童の意見を受け止めることができたと考えられる。

【資料7】 ワークシートの記述より	
第1時	小さいころとくらべて、今は、嫌なことがあっても、すぐに怒ったり、泣いたりしないで、自分で考えて、相手に伝えられるようになった。保護者や先生に相談する。友達の気持ちを考えてから、行動できるようになった。
第2時	心と体がつながっていることが本当だと分かった。自分の心と体のじょうたいが、一日の中で変化していて、心の天気が曇りのときは、よくお腹がいたくなっていた。
第3時	リラックス法をして、肩に力を入れてきつかったけど、一気に楽になってスッキリした。

イ 総合的な学習 「認め合おう 自分のよさ 友達のよさ」

授業後の感想（資料8）やアンケート結果で、自分のよさを見つけることができた児童が92.3%、友達のよさを見つけることができた児童が98.1%、自分の考えや意見を伝えることができた児童が92.3%となり、自分自身を見つめ、お互いに伝え合うことで、よさを認め合うことができたと考える。

授業の中で、自己PRや意見が言えず、困った様子が見られた児童Aに対して、当初は教員らでサポートしたが、次第に周りの児童らが、代わりによさを伝えたり、どちらかの選択ができるよう工夫したりする、といったサポートができるようになった。その結果、児童Aは、意思表示をすることができるようになった。

【資料8】 事後アンケートより抜粋	
 <p>わたしは今まで「みんなにきかされて」「わたしいいところはない」など自分をせめていただけのじょうたいをきいて、自分のいいところともだちいせいがくなどわかって、楽しくてはるが、いそいそおもしろいせいかくでした。</p>	 <p>この授業でグループで話し合っていて「〇〇ちゃんはこのことが好きなんだな」「〇〇くんはこのことが好きだっているのかな」と思っていて、前よりも仲良くなれた気がしてうれしかった。かどりちゃんも私が言っているときにあいづちをうてくれたり、はくしゃをしてくれたりしてうれしかった。</p>

② 児童保健委員会「心も体もスマイル週間」のとりくみ

ア 「3つの大切」についてのとりくみ

「心も体もスマイル週間」後の児童アンケートより「がんばった自分を見つけることができた」と答えた児童は87.9%で、担任のアンケートでも、「自分自身を大切にしていたか」という項目は、活動前と比較し64.5%向上した。また、児童への「周りの人を大切にできたか」という項目では、変化があまり見られなかったが、担任への「周りを大切にしているか」という項目では、活動前は「あまり思わない」が半数だったのに対し、活動後は全員が「とても思う、まあ思う」と答えた。「笑顔のエクササイズを学級で行うことで、お互いにハッピーな表情を見て、よりハッピーになっているように感じた」「はじめてのとりくみでしたが、みんな意識して楽しくとりくんでいた」という意見があり、自他ともに大切にできる機会となった。しかし、「すべて大切だが、めあても多いと、意識が薄れてしまう」という意見もあり、とりくみの内容の多さが、児童の行動の振り返りを困難にし、児童の達成感に変化が見られなかった可能性があると考えられる。

イ 「7つの魔法の言葉」についてのとりくみ

実施後の児童アンケートより、「7つの魔法の言葉」を「すべて知っている」と答えた児童は38.2%から67.6%と29.4%増加し、「意識して使用した」児童が95.6%だった。

また、担任アンケートからも「SCと連携したことで、印象が深くなり、悪い言葉を使った児童への対応も、周りの児童とともに温かくできるようになり、とてもよかった」

という意見があった。その結果、「温かい言葉を児童が使っていたか」という項目に、全員が「とても思う・まあ思う」と答え、実施前よりも数値が上がった。このとりくみにより、自分も友達も大切にするために、温かい言葉を使うことが意識付けられたと考えられる。

(2) 個人への働きかけ

上手くいかないことがあると、教員や友達など周りの人のせいにして、不適応行動を起こしていた児童Bは、来室カードの「感情のラベリング」をすることで、心の状態を自分自身で見つめることができた。その結果、怒りの原因は、勉強への不安や自分自身の行動にあることに気付き、適切な対応について一緒に考えることができた。繰り返し行うことで、周りの人への暴言も減り、保健室の在室時間が大幅に減少し、昨年度と比較して教室で過ごせる時間が増えた。他の教員も児童Bに対して、話しかけやすくなり、伝えた言葉を素直に受け止められるようになったと変化を感じている。来室時の心の状態を見つめる活動を通し、自分の心の成長に気付き、行動の変容につながったと考えられる。

6 研究のまとめと今後の課題

5年生の児童が、昨年度11月に行った意識実態調査や1月のアンケート結果と、本年度7月に実施したアンケート結果（資料9）を比較すると、「自分にはよいところがあると思うか」の項目に、「どちらかといえば思う」と答えた児童が12.7%増加し、「思わない」と答えた児童が10.2%減少した。また、「自分を大切に思うか」の質問には、「思う、どちらかといえば思う」と答えた児童が、72.8%から85.4%に増加した。このことから、本研究によって自分自身を見つめる行動をしたことにより、自分に対する肯定感や自信をもたせることにつながり、自他ともに大切にできるようになった。また、担任や関係職員、保護者と協力し、学校全体でとりくみを行ったことが児童の意識の変容につながったと考えられる。しかし、今回の児童保健委員のとりくみでは、めあてが多過ぎたことで意識が薄れてしまい、「周りの子を大切にできた」という児童の実感が不十分となった。今後のとりくみでは、めあてを絞り、明確化することで、児童の達成感を高めたい。

さらに、現職教育で行っている「豊かな心部会」での自己を見つめ、認め合う活動に関しても他の職員と協力し合い、自他ともに大切にできる児童の育成をめざし、とりくんでいきたい。

<参考文献・資料> あいち健康プラザ「学校教育支援」メルマガ 2020

